さすらいのジェニー

矢川澄子訳

ポール・ギャリコ

さすらいのジェニー

ポール・ギャリコ

矢川澄子訳

大和書房

さすらいのジェニー
一九八三年二月二八日初版発行

著　者　ポール・ギャリコ
訳　者　矢川澄子　©1983
発行者　大和岩雄
発行所　大和書房
東京都文京区関口一―三三
郵便番号　一一二
電話（二〇三）四五一一
振替　東京六―六四二二七
製版所　高長印刷
印刷所　東光印刷
製本所　ナショナル製本
装画・装幀　建石修志
1397-520261-4406　Printed in Japan

さすらいのジェニー・目次

1 事のおこり 7
2 キャベンディッシュ広場からの逃亡 17
3 皇帝のベッド 28
4 ピーターの身の上話 41
5 こまったらなめろ 53
6 ジェニー 64
7 とびだすまえに止まれ 81
8 ご老体をだます 91
9 密航者たち 106
10 グラスゴー行き切符二枚のねだん 118
11 伯爵(はくしゃく)夫人号と乗組員たち 129
12 海に落ちた！ 140
13 ストラーン氏の証拠 153
14 ストラーン氏の証拠、問題を起こす 168

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

15 殺し屋ども 179
16 大空のまい子 191
17 ジェニー告白す 205
18 グリムズ老人眠る 215
19 ロンドンいまふたたび 227
20 キャベンディッシュ広場のエリート 239
21 キャベンディッシュ・ミューズにての再会
22 ジェニーのきめたこと 260
23 ルル――またの名はお魚ちゃん 272
24 密告者たち 293
25 捜索行 304
26 ジェニー、出てこい 317
27 さいごのたたかい 333
28 事の終わり 345

さすらいのジェニー

ねこねこ子猫（ねこ）　どこへ行った？
　女王さまたずねて　ロンドンへ
ねこねこ子猫　なにとった？
　階段の上の　でぶねずみ
ねこねこ子猫　それどうした？
　あとでたべます　お弁当（べんと）に

（スコットランドの子守歌）

1　事のおこり

ぼくはどうやら、事故にあってけがをしたらしいな、とピーターは思った。といっても、付き添いのスコットランド人のばあやのもとをはなれ、向かいの公園へ行こうとして通りを横切ったまではおぼえているけれど、それからさきはまったく思い出せない。小さなめすの虎猫（とらねこ）は、その公園の柵（さく）によりそって、早春の日ざしをあびてひなたぼっこしながら、からだをなめまわしていたのだった。

ピーターは、その子猫をだきあげて、なでてやろうと思ったのだ。ばあやが金切り声をあげた。とそこへ、なにか、おそろしい勢いでどしんとぶつかってきたものがあって、それからあとは、あたかも日が沈んであたりがまっ暗になったと同じ、がらりと昼から夜へ変わってしまったみたいだった。ずきんと痛みが走った。どこかにけがをしているのだった。ちょうど、フットボールの球を追っていって、砂利山のそばでころび、足の片側をほとんどいちめんにすりむいてしまった、あのときの痛みに似ていた。

いまではどうやら、ベッドに寝かされているらしかった。ばあやがそこにいて、妙なぐあいにピーターの顔をのぞきこんでいた。妙な、というのは、つまり、はじめのうちはばあやの顔がすぐ近くにあって、ふだんはしわくちゃで桃色のはずのその顔が、すっかり血のけをうしなっているのがわかるほどだったのに、今度はそれがすうっとかすんで、望遠鏡をさかさまにのぞいたみたいに、小さく小さくちぢみだしたからだ。

父も母も、ここには居合わせなかったけれど、それはべつにふしぎとは思わなかった。父は陸軍の大佐だったし、母はしょっちゅう用事があって、盛装して出かけなければならず、ピーターのことはこのばあやにまかせきりであった。

ばあやをこれほど気にいっているのでなかったら、ピーターもさぞうらめしく思ったことであろう。もう八つにもなっているのに、そのかれを、まるで自分のことも自分でできないみたいに赤ん坊あつかいして、しょっちゅう手をひこうとしたりするばあやなんて、いらないことはわかりきっていたからだ。それでもピーターは、母がいそがしくって、かれのめんどうをみたり、夜、うちにいて、かれが眠ってしまうまでかたわらに付き添っていてくれたりするわけにいかないのを、いまではあたりまえのこととしてうけとっていた。母はますます自分の身代わりとしてばあやをたよりにするようになっていて、いつぞや父のブラウン大佐がもうばあやはいらないのではないかとほのめかしたときも、ばあやなしでやっていくなんて、わたしにはとても考えられませんわと言い、で、もちろんばあやはそのままご奉公しているわけであった。

こうしてベッドに寝かされているからには、おそらく自分は病気らしかった。そして、病気だとすれば、母が帰ってきてそうと知ったなら、いつもよりたくさんそばにいてくれるかもしれなかった。とすると、今度こそは、ピーターの長年の望みをかなえ、猫を一ぴき飼わせてくれるかもしれないのだ。ピーターの自分の猫だ。部屋に飼って、かれのベッドの足もとにまるくなって眠る猫、また寒い夜にはいっしょにふとんの中にもぐりこませて、腕にだきよせてやってもよい、その猫だ。

ものごころついたころから、ピーターは、猫がほしいとずうっと思いつづけてきた。もう何年もまえ、四つのときのことだったが、ジェラーズ・クロスの近くの農園にしばらくいたことがあった。そのとき、台所につれて行かれて、かごの中に子猫がいっぱいいるところを見せてもらったのだ。オレンジや白の、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

ふわふわした毛毬みたいな子猫たちだった。赤毛の母猫はほこらしげに、あふれるばかりのほほえみを浮かべながら、子どもたちをひとりひとり、なめてやっていた。ピーターはそっとその母猫にさわらせてもらった。母猫はやわらかくて、あたたかかった。からだの奥で、奇妙にふるえる音がしていたが、あとできくと、それはのどをごろごろ鳴らしているのだそうで、そんなふうにするときは、いい気持ちで喜んでいるときだとのことであった。

そのときからというもの、ピーターは、猫がほしくてほしくてたまらなくなってしまったのだ。けれども、猫を飼うことはゆるされなかった。

一家は、キャベンディッシュ広場のはずれの厩街とよばれる路地ぞいのせまいアパートに居をかまえていた。父親のブラウン大佐は、ときたま休暇に帰ってくるだけで、ピーターが猫を飼おうと飼うまいといっこうにかまわなかった。母はしかし、このとおり手ぜまで、表からちりやほこりがたんとはいってくるし、猫なんぞいなくてさえ身動きもままならぬありさまだから、といってゆるしてくれなかった。なにより、スコットランド生まれのばあやは大の猫ぎらいで、猫をおそれてもいたのだ。母親としては、ピーターの世話をみてもらっている以上、猫のことなんぞでばあやのご機嫌をそこねてはたいへんであった。

こうしたことをすべて、ピーターは百も承知のうえで、しかたないと思って辛抱していた。ピーターはいつもそんなふうだったのだ。辛抱しているからといって、ピーターの心がこのことから解放されたと思ったら大まちがいだった。若くてきれいな母親は、それほど息子のことにかまけてなんぞいられず、ピーターがしきりに自分の猫をほしがるその気持ちを、じゃまだてするふうでもなかったからだ。

ピーターは、この広場にいる猫という猫のほとんど全部と友だちであった。胸もとに白いぶちがあって、一シリング銀貨ほどもある大きなまるい緑色の目をした堂々たる黒猫は、ミューズに近いキャベンディッ

シュ広場の小さな庭園の番人の飼い猫だった。五号館には二ひきの灰色の猫が、日がな一日ほとんどまたたきもせず窓辺にすわりつづけていたし、十一号館には、緑色の目をした赤毛猫がいて、ボビットさんというこの館の地下室住まいの番人に飼われていた。その隣の建物には、耳のだらりとしたべっこう色の猫がいた。また、二十七号館の窓には、ばら色をしたペルシャ猫が終日クッションの上で眠っていて、晴れたあたたかい日にだけ広場へだしてもらい、外の空気をすわせてもらっていた。

もちろん、このほかにもかぞえきれないほどの野良猫が、ミューズの路地や裏手の爆撃あとの廃墟に住みついたり、柵をくぐって公園にもぐりこんだりしていた。虎猫にぶち猫、黒猫、白猫、レモン色や黄土色やまだらの猫が、ごみためやすてられたあき箱やくず入れをあさったりしていたし、かと思うと、けんかする猫、うなる猫、こそどろをはたらく猫、ごみをさらう猫、宿なしのくせに亭主持ちの猫、老いぼれ猫、子猫、といったぐあいに、ありとあらゆるたぐいの猫が、このとげとげしい住みにくい町で日々の糧をうるという、つらい仕事に憂き身をやつしているのだった。

こういう野良猫を、ピーターはしょっちゅう家につれて帰った。ときには、抱かれただけでこわがって、けったりひっかいたりするのもあったが、かと思うと、ぐったり弱っていて、あたたかくて食べものにありつけるところに行き、人間の手でやさしくなでてもらえるというだけで、大喜びでいそいそとついてくるのもあった。

いつぞやは、ばあやの目をぬすんで、一ぴきを子ども部屋の戸棚の中にこっそり持ちこみ、まるまる二日も見つけられずにすごしたことさえあった。

ばあやはしかし、家の中で猫を見つけたらどうするか、かねてブラウン夫人から言いつかっていたとおり、見つけたとたんに玄関のドアをあけて、「出てゆけ、しっ、このきたないやつ！」と叫んで、ほうき

をふりまわして追いかけたりしたものだ。それでもききめがなくて、追われた猫が部屋のすみにうずくまってしまうと、今度は首根っこをつまんでこわごわ遠くにぶらさげ、表へほうりだした。そうしてから、ばあやはピーターにおしおきをした。とはいっても、そのおしおきよりはるかにつらいのは、せっかくのあたらしい友だちを失ったことであり、やすらかに腕に抱かれていた猫のいかにもしあわせそうなようすを思い出すことのほうだった。

ピーターは、そんなめにあってももはや泣いたりしない習慣すら、ちゃんと身につけていた。声なんか立てなくたって、ひっそりと心の中で泣くことができる。それをすでにさとっていたのだ。

いまこうして病気だということだって、同じことだった。ただ、一つだけちがうことは、今度ばかりは声をあげて泣きたいと思っているのに、その声がどうしても出てきてくれないのであった。いったいどうしたわけだろうか。だいたい、郵便屋とおしゃべりしているばあやの手をふりきって、小さな虎猫のあとを追って道路を横切ったとたん、なにかが起こったのはたしかだが、それからというものは、おかしなことだらけで、これもそのつづきだということ以外はわからないのだ。

実際には、一台の石炭輸送車が広場の角からフルスピードであらわれ、ろくに見もしないで角から車の正面にとびだしていったピーターとぶつかって、かれをはねとばしたのだ。けれども、そのあとにつづいたこと、叫び声があがり、人々が集まってきて、ばあやがおろおろ泣き、警官がピーターを抱きかかえて家の中に運び入れ、医者がまねかれ、母親が呼びにやられ、それからやがて病院送りになったこと、そうしたことどもをピーターは、ずうっとあとになるまでまったく知るよしもなかった。それほどにもたくさんのふしぎなできごとが、さしあたってかれ自身のうえに起こっていたのだった。

なにしろ、どう考えても万事がおかしなぐあいにひっくりかえったようで、夜からたちまち昼へ、あっ

というまに変わってしまったのだ。まるで映画のスクリーンでも見ているみたいに、明暗がぱっと切りかえになり、はじめは上のほうにあったような気がしたばあやの顔が、遠のいてかすんでいったかと思うと、ふたたびもどってきたときには、今度は近づいてくる自動車のヘッドライトみたいに、めがねのレンズをぎらぎらと光らせているのだった。

けれども、なにが奇妙だといって、今度こそ奇妙きわまることが起こったのがわかった。まずばあやが遠くにかすんでいって、ベッドが波にただよう小舟みたいにゆれたような気がしたあと、ふたたびばあやが近づいてきたときには、それはもうばあやではなくって、あのときの小さな虎猫の顔をしていたのだ。ピーターがつかまえてだきしめてやろうと思った、あの公園の柵のところでからだをなめまわしていた虎猫であった。

ほんとうだ。そのかわいらしい子猫が、いまではぐうっと大きくふくれあがり、ベッドのわきにすわって人なつっこくほほえみかけていたのだ。目は、スープ入れほどにも大きかった。大きく、明るく、ぎらぎらした目で、ちょうどばあやのめがねみたいに、のぞくとピーター自身がうつって見えるのだった。

けれども、ピーターの首をひねったことに、そこにはたしかに自分がうつっているはずなのに、どう見てもそれが、見なれた自分の姿ではなかったのだ。玄関を通りがてらに大きな姿見のなかでお目にかかる自分、またはばあやのめがねの中で、しょっちゅうおなじみの自分というのは、短く刈った赤毛のちぢれ髪の頭と、まんまるい目と、上向きのだんご鼻と、角ばったあごと、野生のリンゴみたいに紅白まだらになった、ふっくらしたほおをしているはずであった。

はじめのうちピーターは、そこにうつった自分のすがたがどんなふうだか、くわしくたしかめようともしなかった。相手の子猫の瞳（ひとみ）の冷たい緑の淵（ふち）に、自分自身がとけいっているというだけで、たのしく、心

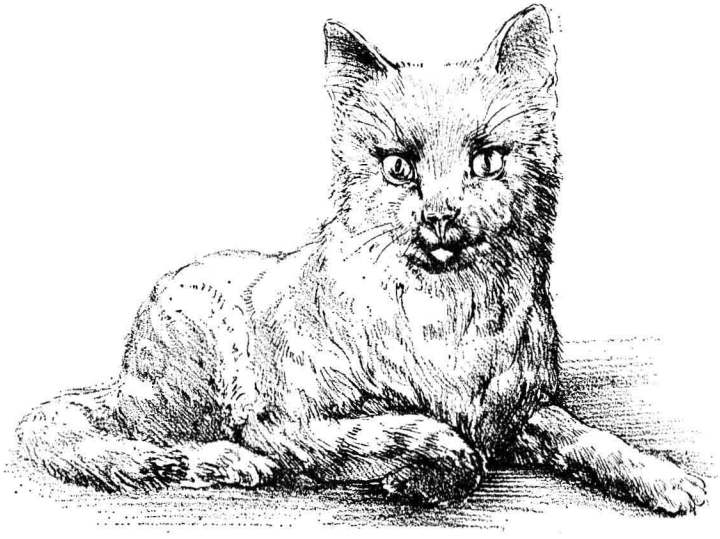
しずまる思いだったからだ。それほどにもおだやかで、底知れず、澄みきった瞳で、なにかこうエメラルドの湖を泳ぎまわっているような感じさえした。こうして美しい色どりにひたりながら、子猫のほほえみにあたたかく身をつつまれているのは、なんともいえずこころよかった。

だが、ピーターにもそろそろ、そこに起こっていることが自分に関係あることがわかってきた。

映像はときどきぼやけたかと思うと、つぎには一瞬ぐっとあざやかになった。おかげでピーターには、自分の首から上のかたちが変わってしまったのがわかった。かたちばかりでなく、色もだった。ふだん見なれた赤茶けたちぢれ毛やリンゴみたいなほおのかわりに、いまでは自分の毛皮がごく短く、ぴんとして雪のようにまっ白に見えたからだ。

「へんだな」ピーターはひとりごちた。「ぼく、どうして髪の毛っていうかわりに、毛皮だなんていっちゃったんだろう。こいつはおかしいぞ。もしそうだとすれば、猫の目をあんまりのぞいたせいだ。それでこっちまで猫になっちゃうんだ」

そう思いながらも、ピーターはあいかわらずじっと見つづけた。さしあたって目をそらすところもなかったからだ。ぼうっとかすむたびに、ピーターの像は、あたかも内側でなにごとかがおこなわれているかのようにぶるぶるふるえた。そして、それがまたくっきりするたびにあらたな特徴が見きわめられるのだった。奇妙につりあがった目は、もはや灰色ではなくって明るい空色をしていた。鼻は、いままで上を向いた小さな六ペンス銅貨みたいだったのが、ばら色の三角形になってすぐ口につづき、その口がまた、もはや自分の口とはとうてい思えないようなかたちに変わっていた。両端がへの字形にさがった、白いするどい、長い歯をのぞかせた口で、その両側にはものすごい白い口ひげが一たばずつ、勢いよくとびだしていた。



顔は四角く、つりあがった二つの目は大きくてぎろぎろ動き、とがった耳は屋根窓みたいにぴんとつったっていた。「なんだ」ピーターは思った。「これは、ぼくが猫だったらこんなのがいいなって思っていたのと、そっくりじゃないか。こんなふうになれたらとは、さんざん思ってたんだ」ピーターはそこで目をとじてしまった。この奇妙な見なれない姿がまぎれもない自分のだとわかって、少しばかりこわくもなってきたからだ。たしかに、猫になりたいとは思っていた。でも、それと、こうして見かけからして猫そっくりになってしまうのとは、また別問題であった。

目をあけると、しばし猫の目の鏡の魔力からのがれられたものか、今度はそれをさけて、かわりに自分の手を見おろすことができた。まっ白で、大きな、毛皮につつまれた手であった。下側には風変わりな、ほんのり桜色したふくらみがあり、トルコの刀みたいに弓なりをした、針みたいにとんがった爪がその先についていた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.